

【実践論文】

教職実践演習（小学校）の概要と課題Ⅱ

広島文教女子大学人間科学部

教授 今崎 浩	教授 岡 利道	准教授 佐伯 育郎
教授 笹原 豊造	教授 杉山 浩之	教授 高橋 泰道
教授 徳本 達夫	教授 村上 典章	

はじめに

本年度は、「教職実践演習」が開講され二年目の年であった。教員養成の最終段階として実践的能力の養成の仕上げの位置づけとなる本科目では、昨年度同様、①15回の通常の授業と、②課題（指導案やレポートなど）の学修すなわち学校を中心としたボランティア活動、各地の学校教育研究会への参加などの自主学習（15回分、24時間）の二本柱で展開した。①においては、指導案作成や模擬授業、場面指導などの実践的な内容を十分に取り入れることを教育方針とし、事例研究、グループ討議、ICTに関する技能の習得などを指導上の留意点とした。なお、今年の変更は、広島文教学会の30周年記念大会での実践研究会及び講演会視聴を授業として位置付けたことである。②に関しては、昨年同様、教員側が積極的に情報提供を行った。実際の授業の概要と課題をここに報告する。

（授業運営責任者：杉山）

第1・2回「オリエンテーション」

本科目の趣旨と授業全体の進め方を説明した。昨年度の学生のレポート「教職実践演習の学び～まとめとこれらに向けて～」を紹介し、授業のイメージや目標を具体的に提示した。学生たちは、これに応え、履修カルテを見直し、自分の課題を考えたことがレポートから伺えた。（担当：杉山）

第3・4回「教育時事問題の学習」

1. 授業構想

時代や社会は時々刻々動き続ける。時事問題への興味関心を持つことは、真空の中で生きているわけではない児童へ関わる教員にとっては必須の作業である。表層部分に関わる時事もあれば、底流部分に関わる時事もある。教職の専門家としては、表層のそれにも関心を持ちつつも、底流部分で蠢いている本質にも目を向けようとする感受性が必要である。そのような感受性を高めることは、最近、とみに憂慮されている知性の劣化を防ぐために不可欠である。教育における不易と流行の問題として考える姿勢である。

2. 授業の実際

初回ガイダンスで資料を基に授業の趣旨と事前課題作成について説明した。授業当日は、各自が作成してきた時事問題への応答レポートを並べ、30分程度、最低でも3件以上の作品に短評を記す作業をした。私も3編作成、提示した。時事問題に迫る学生の日常の実態が見えてきた。情報機器を活用して学生は必要な情報を得ている。本時は、主に新聞記事が素材になると思われた。いわゆるベタ記事を取り上げた学生から、特集記事を取り上げた学生までいた。ベタ記事では表面的な短評しか書けない。疑問が多々浮かぶことはよしとしても、授業の材料にはならない。道徳授業では資料の活用、資料の開発が授業を活性化するために求められる。応用問題としての時事問題を読み

解く作業である。

3. 成果と課題

本学教員採用対策セミナーの一環として、私たちが担当する集団討論セミナーでは時事問題も活用して来た。本演習受講生の全員が受講しているわけではないため、どこまで時事問題への関心の喚起に繋がったかは不明である。だが、本演習受講生全員が単位取得した道徳教育指導法では、時事問題と絡めて授業の主題に関わる価値選択の主体性形成に資する工夫を示した。また、指導案の略案作成の課題でも時事問題を絡めて作成する学生も3割程度はいた。本演習で特集記事を材料にした一部の学生を除けば、分量自体が少ない記事を材料に課題に取り組んだ学生が多かった。底流部分を探ろうとする特集記事でなければ時代や社会の変化を捉えることは困難だろう。点としてではなく、面や立体としてことがらを捉える姿勢を日常的につける姿勢が求められる。実際生活はすべて時事問題が関わる。個人的なことはすべて社会的なことである。「良識ある公民たるに必要な政治的教養」の一端はこうした時事問題への関心から生まれる。教職課程教育のみならず、大学教育の中で時事問題への興味関心を喚起するような取り組みは必須となる。学士力の中味は多々要素はあるものの、総じて言えば、参加民主主義的教養の育成ということに逢着する。それはグローバル化社会の中で修得すべき感性と知性であろう。(担当：徳本)

第5・6回 「学級経営と学級活動」

昨年度の課題は次の二点であった。一点目は、小学校免許のみを取得する学生と小学校・中学校両方の免許を取得する学生とで特別活動に関する理解や指導案作成の面で差があること、二点目は、学生自身が話し合い活動の意義や方法についてほとんど指導された体験がないことである。そこで、教育現場に出た場合に最も必要に迫られる学級経営について取り上げ、学級活動の指導案を作成することを目標とした。具体的には、学級における学級担任の役割と配慮事項を確認し、話し合い活動の意義と方法について説明した。講義後、学生の中には、自分たちが効果的な話し合い活動について全く指導を受けなかったことに対してショックを受けた者もいたが、逆に自分は児童にきちんと指導するという意欲を高めていた。事後学修で学級における生活上の諸問題を解決するための話し合い活動を題材とする指導案作成を課題とした。多くの学生が真摯に取り組み、基本的な内容をふまえた指導案を作成していた。しかし、中には学級活動以外の特別活動の指導案を提出した学生もあり、欠席者への連絡も含めて指示を徹底することを次年度の課題とする。(担当：村上)

第7・8回 「様々な生徒指導事例と場に応じた指導」

昨年度の課題は次の二点であった。一点目は、「場面指導」というタイトルが教育活動のどの内容を指しているかが不明確であること、二点目は、相手を納得させるような論理性や表現力などの面で個人差が非常に大きいことである。そこで、タイトルを「さまざまな生徒指導事例と場に応じた対応」とした。具体的には、まず、場に応じた対応に関する基本的な考え方を説明した。次に、休憩時間中の事故の事例について個人で対応を考えた後、グループで検討するという演習を行った。この検討の過程で、学生たちは基本的なことと柔軟に対応すべきことを理解していった。事後学修で多様なケースを想定しての指導構想案作成を課題とした。多くの学生が基本的な流れを理解していたが、例えば「毅然とした態度」などを重視するあまり、共感的な理解の部分が弱い傾向が見られた。論理性、表現力の個人差についての課題は依然として残ったので、この二点を次年度の課題とする。(担当：村上)

第9・10・11・12回

「広島文教女子大学教育学会第30回研究発表大会への参加」 同学会の内容は二部構成となっており、I部は「分科会」として児童教育関係2分科会、幼児教育関係2分科会が設けられ、計12本の発表が行われた。発表者は管理職から教諭、保育士、大学院生まで幅広かった。発表内容はいずれも

実践的な内容で本授業の趣旨に沿う内容であった。学生のレポートを見ると、学び続けることの大切さを感じ取ってくれていることが分かった。Ⅱ部は「講演会」として児童文学作家の角野栄子先生をお招きし、「魔女の宅急便と私」という演題でお話を伺った。先生は自らの作家人生、「魔女の宅急便」の執筆秘話を語られることを通して、自立の意味について考える機会を与えてくださり、貴重な学びの場となった。(担当：今崎)

第13・14回 「教職員のサービスの理解」

今日社会的に大きな問題となっている「学校における体罰」の問題を取り上げ、学生主体のグループ討議と全体討議の授業を展開した。検討の柱は、①体罰がなぜ起こるのかという原因究明、②では体罰をどうすればなくせるのかという昨年と同じ視点で、授業を進めた。②に関しては、学級経営面では、生活ルールの徹底により子ども同士も生活上の課題をお互いに注意し合うことで教師のストレスを減らす、教室をオープンにして参観者を増やす、子どもの良いところを増やして、叱ることを減らすことにより、教師と子どもともに過ごしやすい環境にする。学校経営面では、T/T授業を増やすことや巡回教員によって生活上の課題に関して注意を促すことで教師の仕事を分担する、研修会で教師自身が自己の振り返りをし指導方法の徹底を図る、ストレス発散や親睦会などで人間関係や協働体制を作ることなど、学生のグループ討議と全体討議で実践的知識の共有化が図られた。(担当：杉山)

第15・16回 「学級通信の意義と作成方法」

学級通信の意義・役割、留意事項、作成方法等について講義を行った。事前学修としては、各自が保管している学級通信を探しておくこと、自分のクラスの学級経営について考えておくこと、1年次の教師論テキスト（佐伯作成）に掲載されている学級通信の例を見ておくことを設定した。事後学修では、本講義での学びをもとに、学級通信を各自作成した。学生たちは、手がきの味を生かした通信、パソコンで作成した通信、手がきとパソコンを併用した通信など、本講義での学びを活かして様々な学級通信を作成した。追加資料として、昨年度の学生作品を配付したこともあり、今年度は内容も充実していた。本講義では、1年次の教師論の復習も交えたが、教師論テキストを持参した学生が少なかったことが反省点として挙げられる。これは、昨年度同様であった。小学校時代の学級通信を保管している学生、学級通信についてしっかり記憶している学生が多く、入学以前から教職に対する意識が高かったことがうかがえた。1例ではあったが、学生が持参してくれた学級通信を最終講で紹介した。(担当：佐伯)

第17・18回 「教室環境づくり」

教室環境づくりとそのあり方について具体的に講義を行った。教室環境の作成方法、留意点等を取り上げるとともに、教室外の環境づくりについても言及した。事前学修としては、教育実習（観察実習・本実習）、学習支援ボランティアや公開研究会などで見てきた小学校の教室環境を振り返る課題を設定した。事後学修としては、教室環境づくりの案を各自構想した。自身が構想する学級経営プランを反映した教室環境となっている学生が多かった。特別支援教育に関するこれまでの学びも取り入れ、刺激の少ない教室前面、行動ルールの明確化などを計画に盛り込んでいた学生も見られた。昨年度、教室環境の参考例にするため、広島市内の小学校へ取材にうかがった。取材した学校数が少なかったことが反省点として挙げられたこともあり、今年度は教育実習Ⅶ（観察実習）でお世話になっている小学校の教室環境も取り上げた。今後、さらに取材校を増やし、教室環境づくりの参考資料として紹介していきたいと考える。(担当：佐伯)

第19・20回 「道徳の授業づくり」

1. 授業構想

授業では、道徳授業の特別教科化の意味と問題点を、道徳教育指導法Ⅰの振り返りを主とした。小学校5年生を対象に扱われることの多い、文部省推薦の「手品師」資料を題材に、児童生徒が本当に道徳を学ぶということはどういうことか、学生の学習の材料となるように模擬授業として示した。資料は、小学校教員と大学教員の見解を掲載した新聞記事及び教育課程の変遷に関する歴史的資料、国定修身教科書の内容分析、国語教科書の特徴とその時代背景に関する資料、さらに社会科学分野の教科書検定に関する新聞記事等である。文部科学省『小学校学習指導要領解説道徳』、同『生徒指導提要』も参考資料として活用した。前者については、既習内容のうち最重要事項の概要を中心に、後者に関しては、主に「社会的リテラシー」を中心に、道徳の教科への格上げの意図、背景、実施の際の課題とそれへの対応を検討した。時代や社会が要請する諸問題の解決に道徳授業が一定の役割を持つことは当然であるとはいえ、道徳教育の原理や歴史等も踏まえた、総合的な理解に基づく実践が求められる。

2. 授業の実際と課題

道徳授業指導案構想の作成において、今日の子どもや教育を取り巻く諸問題を解決するために、道徳授業ができることを考える。学生の指導案は、実習先で体験した児童の実態に絡めて、道徳的実践力をもった児童像へと児童が変容するための道徳授業の構想に立った実感のある案であった。

価値项目的には多方面にわたったが、集約すれば、生命尊重に行き着くものが大半であった。改正教育基本法の教育の目標に絡めての指導案も一定数あった。

授業はすべて教員の人間性・専門性がにじみ出る。それゆえ今回も教師の説話を重視した。文科省は資料の解釈と資料の開発の大切さと共に児童生徒の心に響くような教師の説話についても力説している。児童の実態を知悉している学級担任であるがゆえに、担任の説話は児童に届く。児童も担任のことは知悉している。それゆえ、ともに人間的な生き方を探求し続ける中で道徳教育は実質的なものになる。本演習で確認すべきことは、教職を目指す自分がどこまで価値的に高い教員に向けて自己形成しているかの確認である。より質の高い教員を目指して自己形成を続けることがそのまま今後の課題になる。この課題は、先行く教員として、上記の価値を具現化する生き方、授業を展開することによって学習の指針になることが期待される。

教育はアートである。生き方の芸術としてのアートを、それぞれが自分で創造する。そこに他者が関わる。もともと違う存在が互いにねんごろに関わることによって変わっていく。自分の潜在的な資質能力が他者との関わりを通して、開花していく。「ちがう・かかわる・かわる」(大田堯)。(担当：徳本)

第21・22回 「外国語の学習づくり」

小学校英語教育に関して、小学校教員として認識しておくべき情勢について理解を深めた。現在は、教科でなく「外国語活動」として小学校5・6年生で各週1時間を基本として実施されている。その基盤となっているのは、「英語が使える日本人」の育成のための行動計画(文部科学省 平成15年3月31日)である。その中で、国民全体に求められる英語力として、中学校卒業段階では英語検定3級程度、高等学校卒業段階では英語検定準2級または2級程度と具体的に述べられている。小学校での英語教育はその基盤造りであることを確認した。また、小学校英語の教科化についても、教科として扱う影響と教員および現場に課せられている課題について確認した。その例を挙げると、「1. 教科書が必要となる。2. 評価の対象となる。3. 指導の主体は担任となる。4. 中学校入試に英語が導入される。」などである。担任として、英語を指導する力量が求められ、それが担任の評価に直結する可能性を確認した。(担当：笹原)

第23・24回 「国語科・算数科の授業づくり」

国語科の授業づくりにおいては、テーマを「国語科の模擬授業—言語活動の評価を具体的にどう進めるか—」と角度づけをした。国語科の模擬授業を展開する中で、諸課題を出し合い、より確かな授業実践のあり方を見出したいと考えた。この度は、前半クラスで越智学生が、後半クラスで友滝学生が授業者となり、それぞれのクラスで学生の有志3名の協力を得、児童役となってもらい、模擬授業を行うことができた。授業は、第2学年単元「聞いてたのしもう 三まいのおふだ」で、ほぼ45分をかけて実施した。フロア側で観察する学生は、記録用紙に授業の展開を、対象児童を決めてその言動と観察者の気づきを、それぞれ書き記し、授業終了後に考察を書き込む、という流れとした。批評を中心としたディスカッションを最後にし、ミニ授業研究協議会とした。それぞれのクラスで、参加者の声を集め、報告書にまとめて事後に配付した。今後の課題であるが、次年度も、学生の中から授業者を募り、指導内容がより充実するよう支援に努めることである。(担当：岡)

算数科の授業づくりについては、授業担当者による授業開きの模擬授業体験、ノート指導の進めるための資料づくり、家庭学習の出し方や評価の仕方などについての意見交流を行った。これらの活動を通して、学生は「どんな算数の授業をしたいのか」という授業観、それを具体化するための方法と計画を指導者がもって授業に臨むことの大切さを再認識してくれたようであった。(担当：今崎)

第25・26回 「ICT機器の教科指導への活用」

ICT機器活用の良さの問題点について、グループごとに話し合い、ipadを使用し、意見をまとめ、発表を行った。その中で、今求められている情報活用能力の必要性、有効性について、実践事例を通して、講義を行った。また、実際にどんなICT機器を使い、授業を展開するのか、指導案の作成も行った。今後の課題としては、教職履修カルテの内容から、全般的に、ICT教育に関する学修について経験がない、あるいは少ない実態が挙げられた。今後は本授業までに、実際にICT機器を活用する活動を増やすとともに、学生自身が関係する研究会や研修会等に参加して、基礎的な面を学んでおく必要があると感じた。(担当：高橋)

第27・28回 「研究会と学校支援ボランティア活動報告と学びあい」

各自が参加した研究会の様子、ボランティア活動の様子について、グループ単位で情報交換を行い、その要点を用紙にまとめ、発表を通して、学びを深め合った。ボランティア活動については、実際の教育現場に触れることにより、学校・学級の様子、子どもの様子、地域・保護者との関わりの様子などを教育実習に比べ、より具体的に学ぶことができ、今後の自分の教職現場での在り方について考える機会となったようである。

また、研究会に参加することにより、授業研究について学ぶことができたことが窺えた。さらに、授業研究の大切さ、楽しさについて補足し、学び続ける教師としての意欲を高めるようにした。ボランティア活動や研究会に参加した活動報告書も新しく形式を作り、問題も見られなかった。(担当：高橋)

第29・30回 「まとめ」

授業担当者全員から、授業を振り返り、今後の「教職」に対する使命や責務について指導助言を行った。講師のコメントの一部を紹介すると、「レポート内容に独自性が不足している」「マニュアルというのは過去のデータから作成したものであり、常に基本に還って立ち上げていく創造的な精神が欠かせないこと」「オーケストラのような学級と掲げるなら具体的にそれを実現する方法まで考えること」「人間としての生き方を教えられる教育を目指すこと」「授業という縦糸と仲間づくりという横糸」「役割自己が大きくなるためには、人間としての本来的な自己を大きくしなければならない」「21世紀型教育は、思考力、基礎力、実践力と言われているが、異業種の人から学ばねばならない」等々といっ

たものであった。

また、授業後の学生のレポートからは、昨年度と同様、本授業に対して熱心に取り組んでいた様子がわかり、また卒業後に向かう教職への心構えや決意が出来ていることが把握できた。(担当：杉山)

おわりに

本授業の初年度の授業内容は、以上のものであった。昨年度との変更は、外部講師の講義を、本学で開催した文教学会の分科会と講演会に変えた点である。

授業運営者として、二年目の課題は次のようである。課題解決のための準備に今後取りかかりたい。

- ① 本授業は、65人の受講者であったが、欠席0の者は40名ということで昨年度よりも増加した。5回を超える欠席者はいなかったが、1回以上の欠席者25名中9名が、欠席3回以上で昨年と同じであった。中間層の改善は見られたが、三回以上の欠席者数は変化なかった。この点は次年度の課題として残ってしまった。
- ② 来年度のシラバスに関しては、教育現場のニーズにもある「特別支援教育」の内容を新たに盛り込むことを計画している。(授業運営責任者：杉山)